

独の使節団

幕末を活写

江戸幕府との国交樹立を目的に来航したプロイセン（現ドイツ）の使節団が撮った写真が見つかり、版画やスケッチ、報告書などの資料をまじえて出版された。江戸の街や庶民の暮らし、欧米列強に開国を迫られる幕府の緊迫した雰囲気

を伝えている。



「かごに乗った日本人女性」
ドイツ東洋文化研究協会提供

2012.2.9. 朝日

散逸した写真、収集し出版

「プロイセン・ドイツが観た幕末日本」(A4判392頁)。ドイツ東洋文化研究協会(東京)が出した。

フリードリヒ・アルブレヒト・ツー・オイレンブルク伯爵(1815～81)率いる使節団の資料をまとめた。一行は4隻の軍艦で日本に向かい、1860年9月に到着。翌年1月に日普修好通商条約を結んだ。生物や地理の学者、画家、写真家らも随行し、日本を知るための資料を集めた。

なかでも写真は、当時の最先端カメラ6台で数千枚を残したが、大半は油絵などの参考に使われただけで旧東独の資料館などに散逸していた。これをベルギー在住の英国人歴史写真家のセバスチャン・ドブソンさんがドイツ国内の図書館などで見つけ、数年かけて収集。旧知のスベン・サーラ

上智大准教授(日独外交史)と協力して日独英3カ国語の本にまとめた。

写真は約40枚を掲載。約150点の版画やスケッチとともに、神社仏閣を含む街並みや、茶屋で食事をしたり、かごに乗ったりする武士や町民の様子を伝える。伯爵が不平等条約を警戒する幕府との交渉に苦労した話や江戸城撮影に成功した逸話も盛られ、専門家でなくても楽しめる。

サーラ准教授は「資料は当時の絵入り新聞で公開され、ドイツ人は特有の文化を持つ日本の存在を初めて認識した。使節団は、政治目的だけでなく、学術的な役割を果たしたことも知ってほしい」と話す。

6千円(送料別)。問い合わせは同協会(matsumoto@oag.jp)へ。

(吉田美智子)